



Title	大学博物館の蔵書登録とその活用 : 北海道大学総合博物館の事例
Author(s)	持田, 誠
Description	現場からの提言
Citation	図書館界, 61(6), 634-638
Issue Date	2010-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43007
Type	journal article
File Information	toshokankai.pdf



大学博物館の蔵書登録とその活用： 北海道大学総合博物館の事例

持田 誠

1. はじめに

資料は登録し、所蔵情報を公開することによって、初めて有効に活用される。これは図書に限らず、また図書館・博物館に関わらず、資料保存機関としてもっとも基本的な原理である。しかし博物館の場合、図書資料はどうしても二次的な位置づけとなりがちで、資料の有効活用という意味から遅れをとる。

博物館が蔵書目録を発行した例としては、滋賀県立琵琶湖博物館¹⁾や郵政省郵政研究所附属資料館(現、日本郵政株式会社郵政資料館分館前島記念館)²⁾などいくつかの事例があるが、その目録自体がどこに所蔵されているかをまず調べなくては、蔵書を利用することはできない。

一方、首都圏の7館の美術館・博物館では、所蔵する展覧会カタログ等の情報をインターネットで公開する「ALC: Art Libraries' consortium(美術図書館横断検索)」を構築している³⁾。しかし、地域博物館が独自に司書を配置し、図書館ネットワークへ加わることは現状では甚だ困難であり、解決しなければならない問題が多々存在するだろう。

この点、大学には附属図書館(以下大学図書館)が、学内の蔵書情報の発信に主体的に取り組んでいるという特徴がある。例えば、北海道大学には図書館本館、分館の他、各学部や研究所などに部局図書室が存在し、それぞれの蔵書登録状況は、インターネットで公開されている北海道大学蔵書目録(OPAC)システムで調べることが出来る。このOPACに大学博物館の蔵書を公開することで、地域博物館よりも容易に蔵書の有効活用に努められると考えられる。

反面、博物館が独自に蔵書の管理を担わないことで生ずる問題点も存在すると予想される⁴⁾。

北海道大学総合博物館の図書室は、事実上、無人の書庫であり、日常的に来館者が立ち入って書架を眺めることができない。そのため、当館蔵書の利用には、当館内部で研究・学業に従事する教職員・学生以外は、OPACなどによる蔵書検索を利用し、あらかじめ当館での所蔵が確認された図書を利用し、後日来館するというパターンが一般的である。

また、北大OPACはインターネット上に公開されているため、学外者でも利用が可能である。学外者は他大学図書館や市町村等の公共図書館を經由して、当館の蔵書を借り受けることができる。また、大学図書館間では、図書の必要箇所のコピーを請求できるサービス(文献複写)が発達しており、当館の蔵書も、当館図書室を所管する本学附属図書館理学部図書担当(以下、理学部図書室)を窓口を活用されている。

蔵書が活発に利用されることによって、新たな図書資料が当館へ集積されることに繋がり、博物館図書室の存在意義をより高めることになる。また、博物館図書室の活用実績を数値化し記録にすることで、とかく入館者数一辺倒になりがちな大学博物館に対する評価に、図書資料の有効活用という視点を加え、博物館への評価をさらに高めていくことにも繋がるだろう。

こうした大学博物館と大学図書館との連携による博物館図書室の業務の特性や課題をさまざまな角度から分析・検討することで、資料の有効活用や「利用のための資料保存」についての新しい方向性が見えてくるのではないかと考えられる。

本報では、北海道大学総合博物館図書室の蔵書について、図書登録を大幅に進める以前と以後とでの

利用動向を調査し、博物館図書室における蔵書の有効活用と図書登録の意義を検討した。また、大学博物館が蔵書の利用統計をとることの意義とその為の課題について考察した。

なお、本報では「図書」と「逐次刊行物」を合わせて「図書」または「図書資料」と表記した。

2. 調査方法

調査期間は図書登録が停滞していた2006年度から、進捗途上の2007年度、登録情報が公開され、軌道に乗り始めた2008年度までとした。但し、文献複写・相互貸借については総合博物館で記録を管理しておらず、所管する理学部図書室での記録が2007年度以降分しか存在しなかった為、両年度間での比較となった。

貸し出し利用件数は、当館図書室に常備している貸し出し簿から直接割り出した。その際、当館図書室に図書と共に収蔵している地質図などの図面類についても、同じ貸し出し簿に利用記録が残されているが、これらは登録対象となっておらず、博物館および理学部の関連学科の学生が研究利用の為に持ち出しする際の記録で、図書資料とは性質が異なるため、区別して計数した。

文献複写・相互貸借件数については、所管の理学部図書室に利用実績の割り出しを依頼した。

利用件数はタイトル別総利用件数とし、同じタイトルの図書が別の日に同じ利用者に利用されていても、それぞれ別件数として計数した。

貸し出し利用実績のあった図書については、北大OPACによって学内の登録状況を調査した。また、文献複写・相互貸借での利用実績のあった図書については、国立情報学研究所が提供するNII学術コンテンツ・ポータルWebcat Plusを用いて、全国の大学附属図書館等における登録状況を調査した。

3. 結果

図1は2006年度から2008年度にかけての図書貸し出し利用件数である。2006年度は登録前、2008年度は登録後で、2007年度から明らかに貸し出し件数が増えていることがわかる。

図2は、2008年度1年間に当館から貸し出された図書のうち、北海道大学内の他の図書室でも登録している図書と、当館でのみ登録の図書に分けて、利用件数を調べてみたものである。その結果、総貸出

件数134件中、半数以上の68件が、学内で当館図書室でのみ登録している図書であった。

さらに、当館でのみ登録されている68件の内訳を示したのが図3である。2008年度に貸し出し実績のある68件の、当館でのみ登録されている図書のうち、28%にあたる19件は、他の博物館から送付されてきた紀要や図録などの、いわゆる博物館出版物(交換図書)であることが明らかとなった。

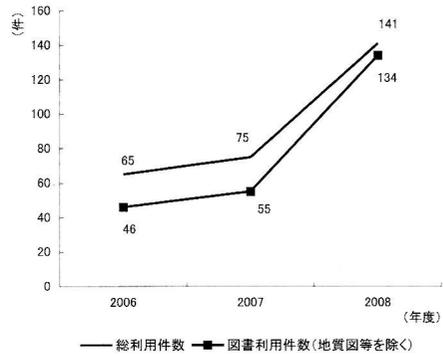


図1. 2006-08年度にかけての北海道大学総合博物館図書室蔵書貸し出し利用件数

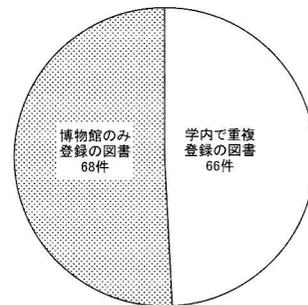


図2. 北海道大学総合博物館の2008年度貸し出し図書の内訳

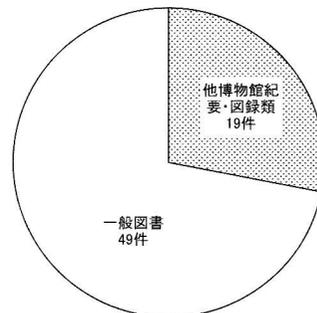


図3. 北海道大学総合博物館図書室における2008年度貸し出し図書のうち、博物館でのみ登録の図書の内訳

次に、大学間利用、すなわち相互貸借と文献複写制度の利用実績を示したものが表1である。

図書登録が進む前の2007年度の利用実績は、文献複写が8件、相互貸借は0件であった。これに対して図書登録が進んだ後の2008年度は文献複写が12件、相互貸借が5件であった。このうち、全国で当館にしか所蔵が登録されていない図書の利用件数は、2007年度は0件、2008年度は文献複写2件、相互貸借2件であった。

表1. 北海道大学総合博物館図書室蔵書の大学間利用の状況

	2007年度	2008年度
文献複写利用件数	8 (0)	12 (2)
相互貸借利用件数	0 (0)	5 (2)

* ()内は利用件数のうち全国で当館でのみ登録している図書の利用件数。

* 2006年度以前はデータが残されていない。

4. 考察

(1) 図書登録と利用実績の関係

学内者が直接当館へ足を運び、蔵書の貸し出しを受けるケースを「直接的利用」とし、学外者が相互貸借や文献複写によって当館蔵書を利用するケースを「間接的利用」と呼ぶことにしよう。図1は直接的利用件数が図書登録進捗以前と以後でどのように変化したかを示している。

2006年度現在、地質図等を含む当館図書室の総貸出件数は65件であり、このうち地質図類を除く図書資料の総貸出件数は46件であった。2006年度以前にも相当数の蔵書が登録されていたが、この時点では館内の諸事情により、新着図書・雑誌類の登録がほぼ停止している状況であった。書架に配列されているものの未登録。もしくは段ボール箱に収納されている状態の新着図書および移管図書が多数存在していた。

2007年度からはこれら未整理図書・未登録図書の登録作業が少しずつ始まっている。北大では、図書登録は部局図書担当を経由して附属図書館本館において行われるため、登録までには日数を要する。今回のように、未登録図書を一斉に登録に出す場合には、時に数ヶ月を要する場合もある。2007年度末から2008年度にかけて、大学図書館システムそのもの変更もあり、登録に要する時間が通常より長くかかったため、当館未登録図書の大半は、2008年度に

なってようやく OPAC や Webcat 上に姿を現すようになる。

図1の数値はこうした当館未整理図書資料の動向をそのまま反映している。新たな登録情報が公開され始めた2008年度は2倍以上の利用者数を獲得しており、これは明らかに図書登録の効果である。

その裏付けとなるデータが図2である。2008年度貸し出し利用件数の過半数は、学内で当館でしか登録していない図書だった。このことは、これらの図書を直接利用する機会が、蔵書登録以前は無かったことを示唆している。多くが未登録状態だった2007年度以前は、保存しているだけで使うことのできない死蔵の状態にあったものが、登録することで多方面への貢献が可能になったのである。

同様のことは間接的利用についても言える。表1によれば、2007年度の相互貸借件数は0件であったものが、2008年度に5件の利用を生み出している。微増ではあるが、文献複写件数も2008年度に10件を超えている。注目すべきは、文献複写・相互貸借ともに、2008年度になって、全国で当館のみ登録している図書が2件ずつ利用されていることである。直接的利用と同様、間接的利用にとっても、蔵書登録の効果が現れている。

(2) 重複資料中心から独自蔵書への成長

直接的利用の過半数が、学内では当館にしかない蔵書だった点については、当館図書室の蔵書構成が、発足時に比べてオリジナル性の高いものに発展してきている現れでもあると言える。

1999年の当館発足以来、図書室の蔵書は、一部の購入図書に加え、学内各所から移管された重複図書の存在が大きかった。退職教員の蔵書や閉鎖される研究室蔵書を移管し、博物館蔵書としたものが大きな割合を占めていたのである。

加えて、当館の専任教員は、基本的に自らの研究に必要な図書は各自の研究室で蔵書を構築している。したがって、多くの当館専任教員にとって今現在必要とされている図書は図書室には殆ど無く、館員と図書室蔵書との間には、意識の上で距離があったと考えられる。

結果として、当館図書室は学内での重複図書や、学内で不要になった図書の集積場所＝図書室という見方をされることが多かった。こうした見方からは、書庫を「図書室」として発展させていくという発想

が、館の内側から湧き起りにくいと推察される。

しかし、今回の調査結果から、当館の蔵書は館外のさまざまな人たちに「必要とされる資料」であることが明らかとなった。開館10年目にして、当館の蔵書構成は館員の知らない内に成長を遂げ、オリジナル性の高いコレクションに発達していたのである。このことは、当館の将来計画を検討する上で、図書室とその蔵書は無視できない存在となっており、これからの位置づけや管理体制について吟味すべき段階に来ていると言うことが出来よう。

(3) 博物館の特性を利用した蔵書構成

図3が示すとおり、2008年度の直接利用の対象となったタイトル68件のうち、19件は他博物館から寄贈された博物館出版物であった。これらは、出版物交換によって当館宛に送付されてくる各博物館の紀要、年報、資料目録、企画展図録、博物館概要、展示解説書などであり、一部には日本博物館協会や北海道博物館協会などの博物館関連団体が発行する統計資料や調査報告書も含まれる。

こうした資料類は、当館が博物館だからこそ集まってくる資料であり、北大に数ある図書室の中でも当館ならではのコレクションと呼べるものである(なお、北大には当館の他、キャンパス外に北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション植物園＝北大植物園があり、園内の博物館でも同様の蔵書がある)。こうしたコレクションの利用実績は、大学博物館の存在意義を考える上で、一般図書(博物館出版物以外の図書)に比べても重要度の高いデータであると言える。

(4) 現状の問題点と今後の課題

本調査にあたり、学外からの文献複写・相互貸借利用に関する統計は理学部図書室の協力を得た。しかしながら、2006年以前のデータは理学部図書室に存在せず、1999年の開館以後の経年変化を遡することは不可能であった。加えて、今後、同様の統計を継続的に収集していくことは、事務的な事情から現在の組織体制では困難であることもわかった。このことは、博物館として収集資料がいかに活用されているか?という利用実態を常時把握することが、図書資料に関しては不可能であることを示している。

前述のとおり、当館では図書登録業務を理学部図書室に依存している。このことは、博物館自身が新

着図書の受入・登録について人員や予算を抱えることなく、スムーズに連携できるという大学博物館の利点である。反面、図書業務を全面的に大学図書館へ依存してしまうと、大学博物館自身に図書業務に関するノウハウの蓄積がされにくいという、大きな欠点がある。

また、現状では博物館図書室とはあくまでも自称であり、組織上、当館には図書室が存在しない。大学の組織上は、あくまでも理学部図書室の管轄下にある一書庫という位置づけであり、それは例えばWebcat Plus上に当館の名称が一切登場せず、「北大理・研究室〔北海道大学理学部の研究室〕」と表記されてしまうことに如実に表れている。つまり、対外的には当館図書室は幻の存在であり、大学博物館図書室の存在を積極的にアピールできない弱さがある。

また、直接的利用については、貸し出し記録に基づく帯出図書件数のみを統計にせざるを得ず、貸し出しを伴わない利用件数については数値化できなかった。しかし、実際には現物を確認した上で貸し出しの必要が無いと判断されたり、閲覧のみで利用されるなどのケースも少なくないはずである。現状では、これらの来室利用全般に関する利用動向を日常的に計数することができておらず、断片的な直接利用統計に留めざるを得ない。この点は今後の課題である。

なお、一般図書についても、当館では総記(分類記号069)で区分される博物館学関係図書の収集を行っており、こうした蔵書の利用割合が高い。また、植物分類学や昆虫分類学など自然史分野の研究室が存在することから、地域自然史研究会などが刊行する図書・逐次刊行物類も蔵書構成で高いウェイトを占めている。これらは博物館出版物では無いが、自然史分野を有する博物館ならではの蔵書構成と言える。こうした蔵書構成全体に対する当館図書室のコレクション特性に関しては、さらに詳細な分析が必要であろう。

5. おわりに

実は当館は、開館当初より、展示や普及活動などによる学外の人たちの利用に比べ、学内の教職員や学生に対する貢献度が低いことが、博物館点検評価委員会でも指摘されていた⁵⁾。しかし、本調査結果から、当館の蔵書は学内の構成員にも一定の貢献を果

たしており、その役割は今後も増大する大きな可能性を秘めていると予測された。にも関わらず、当館ではこれまで、図書室に関する利用実績を把握することも、これを公開することもしてこなかった。⁶⁾

収集資料の利活用の動態把握は、博物館経営上、不可欠である。さらに言及すれば、図書室全体の蔵書構成について、常に意識的な運営を心がける専任職員が当館自身に存在しないことは、図書室の存在価値を発揮させる上で不十分な体制である。大学図書館と連携した図書管理業務を行うにしても、図書館学的な知識・技術を有し、博物館図書の管理を業務として行う専任職員の配置が、将来的にはもっとも望ましい。しかし当面は、現状の体制における図書資料に関する利用統計のあり方とそのため事務体制、特に図書担当職員の配置について、前向きな検討が必要である。

謝辞

当館所蔵図書の利用状況調査にあたり、北海道大学附属図書館理学研究院・理学部図書担当の長井伸一係長(当時)、石森久美、松野とも子、山家尚子事務職員はじめ、係員の皆様方には特別にご配慮・ご協力を頂いた。その他、関係する職員の方々に対して、ここに記して謝意を表する。

注

1) 滋賀県立琵琶湖博物館、『逐次刊行物(国内定期刊行物・大学刊行物)』滋賀県立琵琶湖博物館, 2002, 82p. (琵琶湖博物館資料目録8)

- 2) 郵政省郵政研究所附属資料館『図書資料目録, 上・下』郵政省郵政研究所附属資料館, 1992, 421p. (上), 366p. (下)
- 3) 水谷長志, 「美術図書館横断検索」『アート・ドキュメンテーション研究』12, 2005. 3, p. 27-34. <<http://alc.opac.jp/>> [引用日: 2009-08-06]
- 4) 2009年度から、図書登録事務は理学部図書室が実施し、登録処理の終わった図書は当館へ回送された後、当館の事務補助員と博物館ボランティアの一分野である図書ボランティアの手によって、定期的に排架・整理作業が行われる体制に発展した。配架作業や簡単な修復などを担うボランティアが組織され、定期的に活動が行われるようになったことで、蔵書へ新たな命が吹き込まれ、閉架式「書庫」から「図書室」への静かな一歩を踏み出したと言える。もちろんだからと言って、蔵書の全容を把握し、専門知識と技能を持って当館図書室の特性を常に意識した図書業務を担う、独自の専任職員(司書)配置の必要性は、依然として変わらない。
- 5) 例えば2004-06年度に関する点検評価では、「検討課題」に対する評価がC(貢献しているが改善の余地がある)であり、コメントとして「図書館と同格の意識は理解できるが、全教員、学生に対する貢献度の差を縮める必要あり」と記されている。また、「総合博物館の設置目的」についてもC評価であり、そのコメントには「大学博物館としての本来の使命、標本・資料等の研究、教育活用への視点が弱い」とされている。一方、「学術標本」についてはB(よく貢献しているが改善の余地もある)評価だが、図書資料については評価対象となっていない。北海道大学総合博物館点検評価委員会『北海道大学総合博物館点検評価報告書』北海道大学総合博物館, 2007, 170p.
- 6) 例えば『北海道大学総合博物館年報:平成18・19年度』北海道大学総合博物館, 2008.1, 86p.では、図書室や蔵書について全く触れられていない。